剥かれた マドンナ議員

罠に堕ちる人妻の美肉

草飼晃
挿絵／ロッコ

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　マドンナ旋風……4
第二章　周到な罠……9
第三章　強奪された貞淑……52
第四章　秘書にも毒牙が……132
第五章　淫獣地獄……204
第六章　変貌する麗花……226

登場人物 *Characters*

一条 春香（いちじょう はるか）
クリーンな市政を目指す正義感の強い女性市議。濁河市長の不信任決議に向けて奔走している。後頭部でまとめたロングの黒髪にFカップの美巨乳が目を引く二十八歳の人妻。

丸高 歩美（まるたか あゆみ）
春香の秘書。若さ溢れる肢体をパンツスーツに包む、活動的な性格の二十三歳。

濁河 盛司（だくがわ せいじ）
北関東市の市長。額から頭頂部までが禿げた肥満体形の六十歳。悪事を重ねつつも、それを露見させないでうまく立ち回っている。

大藪 増造（おおやぶ ますぞう）
北関東市の土建屋。濁河と癒着し、公共工事を優先的に斡旋してもらっている。春香の夫とは昔からの付き合いがある五十八歳。

塔堂 朋憲（とうどう とものり）
北関東市の重鎮市議。ぎょろ目であばた顔の六十五歳。

鬼怒川 宗靖（きぬがわ むねやす）
北関東市を含む県内に多大な影響力を及ぼす裏の大立者。女はすべて男に仕える牝奴隷だと考えている。細身の七十歳。

第三章　強奪された貞淑

花巻老人と孫娘が帰ったのは夜もかなり遅くなってからだった。いざ打ち明けるとなると、どう切り出していいのかわからない。そんな春香の横で夫はすぐにすやすやと寝息を立て始めた。春香も隆之も朝は早い。迷っているうちに夫は朝食を終え出勤してしまった。

（どうしよう……）

今まで夫に隠しごとなど一つもしてこなかった。今度のことだってすぐ相談するつもりでいた。夫には相談できて当然。頭ではそう思っているのに、夫の顔を見ると話せなくなってしまう。それが現実だった。

（怖い。わたし、怖いんだわ。わたしの身に起こったことを知られるのが）

春香も自分の事務所に向かった。

自宅近くに借りている雑居ビルのひと部屋だ。多くの市議は自宅をそのまま事務所として使っている。春香もそうしていたのだが、マドンナ旋風のせいなのか取材の電話が夜昼かまわずひっきりなしにかかってきて、借りざるを得なくなった。ＯＡ機器も家賃込みでレンタルできたので格安とはいえたが。

（警察にも早く届けなきゃいけないのに。きのうのうちに届けるつもりだったのに）
なのに。今すぐにでも届けなければとは思うのだけれど、いざ受話器を持とうとすると、その手が動いてくれなくなる。これが事件として報道されれば市長を辞職させる大きな後押しになってくれるかもしれないのにもかかわらず。
『女性が安心して暮らせる社会の実現』を政治活動の目標の一つとして掲げ、取り組んできた春香にしてみれば、襲われかかったのに届け出ないなど、考えられないことだった。これまでは。
（こんなに怖いことだっただなんて。こんなに恥ずかしいことだっただなんて）
秘書の丸高歩美には、朝一番で気づかれた。
「おはようございます、先生っ！　一つご報告したいことが――あれ、どうかなさったんですか？　何か顔色が悪いような？　変ですよ。いつもの先生らしくないです」
「大丈夫よ、なんでもないわ。女性ならあることよ。わかるでしょう」
「ああ。あの日なんですか。わたしも重くてキツいんですよね。いやんなっちゃう」
どうやら誤解してくれたようだ。
歩美は春香が大学で助教だった時の学生で、昨年春香が当選してすぐ、秘書として雇って欲しいと頼みこんできた。国会議員ならともかく市議会議員なんて秘書は持たないのが普通なのよ、と説明しても三顧の礼よろしくねばられて、とうとう根負けし、

じゃああしたから来てくれる？　と言ってしまった。
　しかし雇ってみれば歩美は有能だった。つき合っている男性が地方紙だかスクープ雑誌だかの記者らしく、そのコネもあるのか、情報収集の早さに関しては春香の上を行くし、電話応対もそつがない。朝は早くから来て美味しいコーヒーを淹れてくれる。尊敬のまなざしで見つめ、先生、先生、と慕ってくれる。そんな歩美を春香が自分の本当の妹であるかのように思い始めるのに時間はかからなかった。
　今日の歩美は襟元に小さくフリルの入った白ブラウスに黒のブーツカットパンツ、足元はかかとの高い黒のパンプスという大人っぽい服装。就活中の学生みたいな雰囲気が抜けてきつつある。春香の落ち着いたスーツ姿を意識し、真似しようとしているのかもしれない。
「えっ、どうしたんですか、先生。急に、あたしをじっと見つめちゃって？」
「いいえ。なんでもないのよ。ただ、歩美ちゃん、かわいいなって」
「やだあ、先生。あたし百合じゃありませんから！　ちゃんと彼氏だっていますっ」
　あれっ、どうしてこんな話になっちゃったんだろう、と小首をかしげてから、あっ、そうそう、報告ですよ報告、とつづける。
「市長ですけど、ダム工事の推進やなんかの公約違反どころじゃなくって、公金横領の疑いが出てきました。疑いというより、限りなくクロに近いっぽいですよ、どうも」

それが本当なら六月の議会で追及できるし、不信任決議案提出にとっての強い追い風になる。一気に追いこめる。ただ、慎重になる必要はあるだろう。
「すごい情報だけど……それ、たしかなの？」
「あたしの友人が雑誌社にいまして。今、もっと詰めて調べているところです」
「雑誌社の友人って、その人が歩美ちゃんの彼氏なんでしょ」
「あれ？　ばれてましたかっ。えへへ」
ぺろりと舌を出す歩美。ボブカットの髪がふわりと揺れた。
おっちょこちょいなところもある歩美だが、芯はしっかりしている女の子だと春香は思っている。この子が選んだ男性ならたしかだろう。にっこりと微笑みかける。
「応援するわよ。歩美ちゃんを彼女にできるなんて、その人もラッキーね」
「あたし、今回の不信任決議案の件が終わってお仕事が落ち着いたら、彼と式を挙げるつもりなんです――って。だからどうしてあたしの話になっちゃうんですか！」
もう一つニュースがあるんですと言って、小柄でちょっと丸顔の秘書は可憐に指を一本立てた。
ある会社役員が発起人となってできた「北関東市を愛する市民の会」が濁河市長に解職請求を突きつけるべく準備を進めているようです、と歩美。
「市長に対する包囲網――とまでは言えないかもしれないけれど、こころ強いわね、

それは」
リコールを住民投票に持ちこめるかどうかは署名の集まり次第ではあるが、濁河体制に不信感を抱いているのは市民も同じなのだと春香は実感する。
と。そこまで話したところで、事務所の固定電話が鳴った。
応対した歩美が、受話器を渡しながらマドンナ議員にささやく。
「噂をすればなんとやらですよっ」
昨夜いやというほど聞かされた悪徳市長の声が聞こえてくる。
――やあ。ごきげんはいかがかね、一条春香くん。ふふふ。
「何か御用ですか」
自分の声が尖ってしまうのがわかる。
――決まっておる。わしの提案に乗るかどうか、という用だわい。ひとこと、乗りますと言えば、それでいい。例の写真は全部消去してやる。味方のスキャンダル写真など、わしにとっても邪魔でしかないからの。
歩美に聞かれたくなくて背を向け、小声になって話す。
「無理やり写真を撮られたんです。襲われたのと同じです。警察に届けます」
――ふん。そんなことをしても、あんたの得にはならんと思うがな。わしらがあんたに何かしたという証拠などないだろうが。なあ、一条春香くん。写真を公開された

くないのなら、ひとこと、わしの味方になると言えばいい。それがいちばん早い。わかるだろう？　そうすれば、恥ずかしい思いをさせてしまったお詫びの意味も込めて、改めて、金でも、地位の安定でも、なんでも保証させてもらうよ。

「何を言っているの！」

あんなことをされてもまだ、金に目がくらんで市長のがわにつくような女だと、自分は思われているのだろうか。腹が立ち、つい喧嘩腰になってしまう春香。

「そのお金の出どころはどこなのかしら。後ろ暗いことをなさってできたお金なんでしょう？　あくどいことをして、そのまま通ると思っていらっしゃるのかしら？　首を洗って待っていた方がいいのではなくて？」

――なんだと？

市長の声色が変わった。

春香は自分が口をすべらせてしまったことにすぐ気づいた。公金横領についての調査が入ることを匂わせるようなことを言ってしまった。証拠を隠滅されるかもしれない。今はまだ極秘にしておくべきだった。

――おい、今なんと言った。何を、どこまで知ってる？

「とにかく、そちらの提案はすべてお断りしますから」

電話を切った人妻議員に、歩美が不安げな面持ちで尋ねてくる。

「あのお、先生。なんのお話だったんですか？　提案とかなんとか」
「実はね……」
服を脱がされて写真を撮られたことは伏せつつ、塔堂議員との会見の場に濁河が現れ、取り引きを持ちかけられたことを話して聞かせる。自分はそんな提案に乗る気などない、と宣言する。それは歩美に向かってのものというより、写真を公開されることに恐怖を感じている自分に活を入れるためと言ってよかった。

※

「あの女、何か嗅ぎまわっておるのか……？」
第一庁舎の一角にある市長室。濁河盛司は眉をひそめながら受話器を置いた。
暢気なことは言っていられないかもしれない、早々にあの女を支配下に置かないとまずいことになるかもしれない、と濁河は思った。
後ろ暗いことに、こころ当たりは、ある。ありすぎると言ってもいい。これまでは金の力やバックについてくれている《御前》こと鬼怒川宗靖（きぬがわむねやす）の支配力のおかげですべて隠密裏に処理してこられたわけだが、丹念に掘り返されたら破滅に通じかねないことばかりだ。
もう一度電話機に手を伸ばす。
「ああ、塔堂さんかね。夕べ言っていた大藪さんとの打ち合わせを、早急に行いたい。

昼メシを一緒にどうだ……そうだ。なるべく早くだ。周到な罠だなどと言っている場合ではないかもしれんのだ。多少は無理があってもかまわん。決行は早い方がいい。ああ、そうだ。できれば、今夜にでも」

※

今夜こそ昨夜の料亭での一部始終を話そうと思っていた春香だったが、夫は客を連れて帰ってきた。

「駅でばったり会ってね。それで、うちへ来ていただこうと思って」

「ちょいと久しぶりですかなあ、奥さん。相変わらずおうつくしい。うへ。うへ」

ブランドもののトレーニングウェアを着てめがねをかけた丸刈りの熟年男。市長との癒着が疑われている大藪土建の社長、大藪増造だ。

春香が大学生の時だから六年以上前になるが、ミス・キャンパスの公開イベントにまぎれこんできた大藪が春香に強引に抱きついてきた、という事件があった。春香に頬を思いきり叩かれても、イベントの警備員に厳しく叱責されても大藪はめげず、それ以来何かとつきまとってくるようになった。

その男がまさか、夫が少年野球をやっていた時のスポーツ少年団の監督だったとは意外だった。春香が大藪を毛ぎらいしているのに対し、夫は大藪をいまだに監督と呼び、結婚披露宴にも招待したほどの心酔ぶり。

「いやあ、奥さんと呼んではいけないのかな。マドンナ議員さんだったな。わしゃあ市長さんとも親しくさせていただいてるが、これからは奥さんの方に乗り換えようかな。いや、いや、乗り換えると言っても、変な意味ではないぞ。うへ。うへ」

銀縁めがねの奥で細い目が不気味に笑う。トレーニングウェアに包まれた肥満体は脂肪だけでなく頑丈な筋肉も備えているようで、力士出身のプロレスラーとでもいった風貌だ。今でも朝晩バットの素振りは欠かしていないのだとか。

春香としては、わたしはあなたに用はありません、早く帰ってください、くらいは言いたいところなのだが、さすがにそれは無理。夫にとっての恩師であるのは間違いないのだから。

春香は部屋着姿。ベージュのプルオーバーの上に薄地のカーディガンを羽織っている。魅惑的な太ももを隠すスカートはカジュアルなドット柄。軽い外出着といった感じだけれど、仕事でスーツばかりの春香にとってはリラックスできる服だし、お料理する際にはエプロンを着ければOK。つややかな黒髪は昼間と同じで邪魔にならないシニヨンにまとめて。

「さあさあ、監督。玄関先で立ち話もなんですから、上がってください。春香、冷蔵庫にビールがあったろう？　それと、何か簡単につまめるものを頼むよ」

仕方なくキッチンに向かおうとしたところで、リビングの電話が鳴った。春香が出

ると夫への急用とのこと。通話を終えた隆之の顔色は変わっていた。
「高三の時の担任が亡くなって、今夜が通夜らしい。葬祭センターでやるらしいから、車なら十五分もかからないよな。行ってくるよ」
「あなた、わたしも」
「いや、きみは、せっかく来てくださった監督をもてなしてくれ」
「でも……」
わしならおいとましますよと、なぜかニヤニヤしながら言う大藪。
「いや、監督！　いらしたばかりじゃないですか。追い返すようなことはできませんよ。せっかくなんですから、せめてビールくらい飲んでいってください。ぼくもすぐ戻りますから」
後は頼んだぞ春香、と言って夫は出ていってしまった。残されたのは二十八歳のマドンナ議員と五十八歳の土建屋社長。
「さあて。邪魔者がいなくなって、ようやく二人きりになれましたなあ。うへ。うへ」
不快感以上に解せないものを人妻議員は感じた。
「どういう意味ですか？　ようやくって。まるで、最初から主人が出ていくことがわかっていたかのような……？　まさか」
まさか何かの罠。夫にかかってきた電話も少しタイミングがよすぎたが――？

「うへ。うへ。奥さんの想像通りのようで」
力士体型の土建屋は携帯を取り出して「いいぞ、こい」と言った。通話相手は近所で待ち構えていたのか、ほとんど間を置かずに玄関の呼び出しベルが鳴る。
大藪は勝手に新たな来客を出迎えた。入ってきたのはきのう春香に狼藉を行ったのとまったく同じ顔ぶれ。濁河市長。塔堂議員。市長秘書。
「さあさあ。市長さん、塔堂さん。秘書さんもどんどん上がって上がって」
「ちょっと待ってください！　不法侵入になりますよ！　警察を呼びますよ！」
「不法でも侵入でもねえよ、奥さん。わしゃあ世帯主に招かれた正式な来客だぞ。そのわしが正式に招待したんだからよ。うへ。うへ」
土建屋は口のきき方がいきなり粗雑になっていた。夫がここにいた数分前と比べると別人のよう。
「大藪さんはこの家の人間ではありません。やっぱりすぐ警察を呼びます」
黒髪Fカップの人妻は電話機に手を伸ばす。しかし闖入者の一人、大柄な秘書にニッパーでコードを切断された。スマホは寝室の充電器のところだ。救いを求める手段を失いつつある春香に、ズカズカと上がりこんできた残り二人がにじり寄ってくる。
「それ以上近寄らないでください！」
「なあ、一条春香くん。わしらは別に襲いにきたのではない」

きのう見たのとまったく同じ色のスーツとネクタイを身に着けた禿頭の市長が、気色の悪い猫撫で声で語りかけてくる。
「あの写真はまだどこにも公開しとらん。しとらんが、だ。今日のあんたの返事次第じゃあ、どうなるかわからんのだぞ。どうするね？　それを聞きにきたのだ」
「ですから。そんな脅しはわたしには無駄です。公開でもなんでもどうぞご自由に。ネットに写真が流出するくらい、なんでもありません。世の中は、あなたが思っているほどネットに関心を払っている人ばかりではないと思いますよ。それに、わたしは、卑怯な手を使う人の言うことなんかに耳を貸したくはありませんわ。たとえ交通事故に遭っても、わたしのイメージが悪くなったとしても」
札束を受け取って市長のがわにつくなどという選択肢だけは、始めから春香の中には存在しない。花巻元市長が言っていたような警察に圧力をかけられるほどの力を、たとえ現市長が本当に持っているとしても、だ。
マドンナ市議会議員の決意がわかるのか、男たちは難しい顔になる。
「きのうも言ったでしょうが、市長さん。女など押し倒して手篭めにしてしまうのがいちばんてっとり早いんですよ。ククク」
塔堂老議員の進言に、禿頭の市長は今回はうなずいた。
「どうやら、塔堂さんの言う通りのようだな。ふふふ」

市長。塔堂。大藪。市長の秘書。四人がじり、じりりっ、と間合いを詰めてくる。
リビングの壁に追いつめられるFカップの人妻。
「ど、どういうこと……あ、あなたたち、まさか」
「黒田。やれ」
市長の命令を受けた男性秘書は春香の襟元に手を伸ばしてきた。春香はその腕を逆に自分から掴み、ひねりながら相手を背で担いで投げにかかる。
(ばかにしないでよ。きのうは不意に後ろから紐を巻きつけられてどうしようもなかったけれど、護身術くらい習ってるんだから)
無理やり応募させられたミスコンで優勝してしまった後、大藪に抱きつかれた事件もあったため、万一のことを考えて習っておいたのだ。
もっとも、実際に使う機会はこれまで一度もなかった。それが祟ったのか、男の体重をうまく乗せることができない。背負い投げに失敗した春香の細い首を、巨体の秘書は直接手で絞めにかかってきた。
(それなら、これで、どう?)
肘を相手の腹に入れる——という動きをフェイントにして身体を反転させ、膝を股間に叩きつけてやった。
「……っ!」

急所にヒット。さすがの巨漢も完全に首から手を離し、その場に膝をつく。
振り返ると大藪が腰に抱きつこうとしてくるところだった。かつてと同じように。
「もうっ。近寄らないでっ！」
春香はやはりかつてと同じように、上げた手で思いきり平手打ちを見舞った。ぱしーんという小気味よい音が響き渡り、大藪は倒れこんだ。それでも、頬を押さえながら憎々しげな目で春香を睨みつけてくる。
「このアマ。またしても、わしを愚弄しおって……」
「変なことをしてくるからだわ」
残りの二人――濁河市長と塔堂議員に視線を向ける。
「おい、春香くん。まさかわしらにも暴力をふるう気か」
「こ、こっちはか弱い年寄りだぞ、別嬪さん」
「不法侵入してきたくせに、か弱いも何も関係ないわよ！」
この二人を突き飛ばしてスマホのある寝室に向かうより、玄関から外へ出て救いを求めた方が早いかもしれない。そう判断した。が。背中を向けたのがいけなかった。駆け出しかけた二十八歳の脇腹に何かが押し当てられた。
（……ッ！）
凄まじい衝撃が脇腹から全身に走り――春香は意識を失っていく。

※

「う、うーん……」

気づいた時、春香はプルオーバーにカーディガンとスカートという姿のまま、後ろ手に手錠を嵌められ、リビングの床に転がされていた。

（……手錠まで持ちこんでいたの？　信じられない。完全に犯罪だわ！）

Ｆカップの肢体を取り囲んで見下ろす男たち。黒田秘書の手にはスタンガンらしい物が握られていた。さっき使われたのはそれだろう。土建屋の大藪はまだ、いててて とつぶやきながら頬を押さえている。ということは気絶していた時間はかなり短い。

「よくもやりやがったな。あの時といい、今日といい……今からその身体でたっぷりと謝罪してもらうぜ。うへ。うへ」

カーディガンの前が自然にはだけてしまい、プルオーバーの布地を持ち上げる悩殺的な双球のふくらみに、男たちの好色そうな視線が突き刺さってくる。

「訴えるから！　わたし、今度は本当に訴えます！　きのうのことも含めてです。絶対ですよ！　わたしは、何かされて泣き寝入りするような人間じゃありませんから！」

「ふん、それはどうかな。こちらはなあ、春香くんがそういう生意気な口をきけなくなるくらいに、徹底的に嬲り抜く覚悟で今日は来たんだよ。必要な道具も全部揃えてな。ふふふ」

不敵に笑う市長。手錠をかけられたまま立ち上がろうとする人妻を男たちは押さえこむ。巨漢の黒田に体重をかけられ、左右の足首を大藪に握られる。市長と塔堂も手を伸ばしてくる。多勢に無勢だった。

「離してっ。離しなさいっ。絶対に！　絶対に、許さないから！」

「レイプされた後でも、そんな威勢のいいことを言っていられるかな、春香くん」

「し、市長。なんて人！　レ、レイプだなんて、冗談じゃないわ！　だいいち、あなたたちなんか、どうせもうろくに役に立たないふにゃふにゃなんでしょ！」

「なんだと、言わせておけば、このアマ」

喧嘩を売っているような場合ではないと頭ではわかっていたが、ついそんな言葉が口を衝いて出てしまった。案の定、大藪が切れてしまう。春香が失神している間に勝手に持ち出してきていたらしいビール瓶の中身をかけられる。

「きゃあっ」

手で顔を覆うこともできない。ビールを顔だけでなく身体にも浴びた。プルオーバーやスカートの生地が身体に張りつき、魅惑的な曲面が男たちの前に晒される。

「うへ。うへ。やはりいい身体をしてやがる。思いきりかわいがってやるぜ。なあ、打ち合わせた通り、わしからでいいだろ、市長さん、塔堂さん。何しろ長年溜めこんできた恨みがあるからな、わしゃあ」

市長と塔堂は鷹揚にうなずく。大藪は全裸以上に煽情的とすら言えるびしょ濡れの春香に抱きついてきた。土建屋の饐えた体臭が人妻の鼻腔を犯してくる。

「わしのが役立たずかどうか、すぐにわかるぜ。うへ。うへ」

（う、嘘でしょ。ま、まさか。ほんとうに暴行するつもり……っ？）

「いやよおっ！　近寄らないでっ！　さわらないでえっ！」

清楚な香水の香りを匂い立たせる人妻の両足の間に身体を割りこませ、密着させてくる土建屋。力士並みの体重が遠慮なくかかって、抵抗しようとする動きを封じられる。大藪はプルオーバー越しに春香の乳肉のふくらみや腰まわりを撫でてくる。

衣服越しだからこそ覚えるもどかしいようなくすぐったさ。気持ちではいやなのに、撫でられたところから皮膚は熱くなり、乳房は勝手に張りつめていく。ブラに擦れて乳首から痺れのような甘い痛みが走る。

（どうして、こんな奴に、好きなように撫でまわされなきゃいけないの……っ）

「うへ。うへ。わしをひっぱたいた詫び代わりに、奥さんには思いっきり愉しませてもらうからなあ」

ジャージ姿の土建屋はスカートを掴み、ファスナーを引きちぎると、そのまま剥き下ろしにかかってきた。恥骨のふくらみのかたちを確かめるかのように撫でまわされてから、ショーツまでズルズルと引き下ろされる。生白い素肌とひそやかな陰部が露

わになる。
「ちょっ、ちょっと！　いやあっ。何するの、見ないでっ！」
「おおっと、暴れるでないわ」
大藪は春香の片方の足首を黒田に握らせると、自分も服を脱いで下半身裸になった。塔堂が老人らしからぬ力強さでもう片方の足首を掴んでおり、春香は股を閉じることができない。
（こ、こんな、明るい照明の下でなんて、主人にだって見せたことないのに……っ）
やわらかな恥毛に飾られた二枚のややぼってりとした肉びらのあわいから、それ自体が生きているかのようにかすかにくねり、淡く牝の匂いを吐き出す粘膜が覗いている。その奥にはしっとりとなめらかな果肉の層が隠れている。
露出した五十八歳の肉棒はマドンナ議員のそんな下腹部を見ただけで、勃起しきっているようだった。太い胴体が斜め上を向いてそそり勃ち、充血しきった肉の傘がひくひく、と動いている。
（ああっ、な、なんて不気味な。隆之さんのはあんなに赤黒くもなかったし、グロテスクでもなかったはず……いや、いやよ！）
男を知らないわけではないが、それでも、さあっと鳥肌が立ち、身体ががくがくと震え出す。凶暴そうな剛直で乱暴でもされたら自分の繊細な粘膜は持ちこたえられな

いのではないか、という恐怖で。
震えは横から手を伸ばして衣服越しに胸を揉み始めた市長にもつたわったようだ。
「春香くん。今から大藪さんにかわいがってもらえるのだ。うれしいだろう？　その次は塔堂さんだ。大トリがわしだ。わしの逸物にも期待して欲しいものだわな」
「こ、こんなことは、あなたたち全員の身の破滅になるのよ。そんなこともわからないんですかっ！」
全力を振り絞って自由を取り戻そうと試みる。しかし男四人分の腕力や体重で押さえられている上に手錠まで嵌められていては、どうしようもなかった。おまけに、暴れようとしたことで剥き出しの女陰がみだらにくねってしまったらしい――。
「そんなにくねくね揺さぶられたら、わしゃあよけい興奮するぜ。うへ。うへ。気持ちよくしてやるからな、おい」
足首にからまっていたショーツを荒っぽい手つきで抜き取ると、五十八歳の野獣は人妻の股の間に身体を割りこませた。太ももを抱き寄せるようにして抱えこみ、屹立した男根の先で亀裂の上を撫でる。
（ああ、なんて硬い亀頭なの。それに、お、温度までつたわってくる……熱い）
犯される恐怖が春香の顔にはっきりと表れる。大藪は満面に喜色を見せた。
「お願い、お願いです、やめて……っ」

「奥さん。急にしおらしい口をきいたってよ、今さら遅いんだぜ。うへ。うへ。奪ってやるよ。わしゃあ、奥さんとは前からこうしたくて仕方なかったんだからな！」

まさかと思った。いきなりずかずかと家に踏みこまれただけでも異常な事態なのに、そいつらに襲いかかられ、ショーツまで脱がされてしまうなんて。

「しゅ、主人はすぐ帰ってくるわよ！　お、大藪さん、いくら主人の恩師だからって、もう主人だってあなたには騙されないわ！」

「あいつなら当分帰ってはこんわい。今頃はわしのところの若い者に先導されて、南関東郡に向かっている頃だわい。通夜の会場が急遽変わったというでたらめを信じてな。片道一時間以上はかかる僻地に連れていけと命じてある。うへ。うへ」

「そんな。う――やだ……ッ……ひ――ぃ」

卑劣な熟年男の亀頭がまた亀裂の上に触れてきて、春香の喉はひくんと引き攣ったような音を鳴らした。先端が半分、押し広げるように侵入しかけていた。野獣の体重がかけられ、もじゃもじゃした陰毛の感触が、甘美な肉体を備えた人妻市議の下腹部を責めてくる。捉えられた膣口へ先走りの汁でぬらついた亀頭が侵入してきた。

潤みの足りない春香の粘膜は頑強にそれを拒む。だが。

めりめりめりとこじ開けられていく。これまで夫にしか許したことのない肉粘膜が。のしかかってくる相手の体重が不快だった。吹きかけられる相手の口臭がいやだった。

密着してくる相手の肌の感触が気持ち悪かった。大藪は少しずつ自分の腰を進めて結合をより深めようとしている。
「もうやめてください。いや。これ以上は。う。う。いや、硬い」
強い責任感を持つ新人女性議員の額や鼻の頭が噴き出る汗で濡れていく。ちくしょういやに頑なだなとぼやきながらも、本能剥き出しの土建屋社長は力ずくの侵攻を諦めようとはしない。だが春香の膣肉も簡単には挿入を許さない。ぴっちりと固く塞がって相手を拒んでいた。
苦戦している熟年男に濡らし方が足りないようだのうと市長が声をかけるが、大藪は平手打ちされたお返しだからせいぜい苦しませてやるんですよと答えた。
鬼畜な土建屋自身もこめかみの上あたりからあごにかけてぽたぽたと脂汗を流している。だがその目は少しも苦しがっているようには見えない。歓喜に輝いている。歯をギリギリと鳴らしながらもその口元には笑みすら浮かべている。
「うへ。うへ。だんだん、入っていくぜ。奥さんの中に」
（いやっ、熱くて強張ったものが、わたしの中に、無理やり……っ）
花弁の奥のやわらかい肉粘膜が軽石で擦られているかのように鋭く痛んだ。視界が涙に覆われ、脳の中が沸騰した蒸気みたいなものでいっぱいになって、ものが考えられなくなってくる。

恐怖と緊張で収縮しきった膣道がとうとう奥まで割り開かれた。それまでは何度か突きを受けてもかろうじて跳ね返していたぷりぷりの肉粘膜が、今度は強い挿入に抗いきれなかった。

（ああ、太い、太いわ……それに、エラのところが熱くて硬い。引っ掻かれる！）

くうぅ、と喉からうなるような苦鳴を洩らし、糸で引っ張られるように春香はあごを上に向け、無防備な喉を男たちの眼前に晒していた。

（あなた。隆之さん。早く帰ってきて！　わたし、わたし、奪われてるのよ……ッ）

みしみしと押し開かれ、鬼畜な熟年男の肉棒が根元まで埋まった。

（苦しい……息ができない……わたしの中のひだが強引にめくり返されてる気がする。ああ、またみりみりって硬くなった……ッ）

媚肉の奥深くにぴっちりと包みこまれるその刺激だけで亀頭肉はそれまで以上に膨張したようだ。

「ちくしょう、出しちまう」

言ったとたんに大藪は一気に噴きこぼしていた。どくっ、どくっ。気持ちよさそうに目をつぶり、うう……とうめき声を上げながらぶるっ、ぶる、と腰を震わせる。

「う、嘘っ、だめっ！　中でなんか、いやよ。出さないでえっ！」

「うう、うう――そんなこと言われたって、もう遅いわい。おなごの子壺にねっとり

と包みこまれながら中出しするのは、やはりたまらん気持ちよさだわい……」
汗を拭いながら熟年の土建屋は、ふはーっと臭い息を吐き、ゆっくりと腰を退き始める。抜き取られた膣口と亀頭を結ぶ白い粘液の橋からはつーんと強い腐りかけの葉っぱのような匂いが漂う。
それでもまだ春香は、中出しされたということなど信じたくはなかった。しかし、膣壁には確かに、どろどろとしたスペルマの重みを感じる。
(そんな。本当に中に出されちゃったの……?)
取り返しのつかないことをされてしまったのでは。日常が足元からグラグラと崩れ去ってしまったかのような絶望感に襲われ、春香はしばし、男たちに半裸体を見られていることすら忘れてしまった。視線はうつろになり、前を見ていてもそれが脳内で像を結ばなくなっている。
(ひどい……ひどい……なんてことを)
「大藪さん。あんた、別にふだんは早漏というわけじゃなかろう。そんなにいいということか、別嬪さんのおま○こは」
「塔堂先生、そ、そうなんですよ。ろくに濡れてもいないのに、奥の方ですごく締めつけてきまして。いや、油断してたんですが」
それじゃあわしは、まずはおま○こ以外で愉しませてもらうとするかな——そう言

いながら塔堂老議員がスラックスを下ろし、ブリーフも脱ぎ、肉砲を飛び出させる。
「さあさあ。何を虚脱したような顔になっておるか。シャンとせい」
頬を叩かれて、春香の意識はまた現実に戻ってきた。その眼前にあるのは――。
（ああ、これも。怖い。それに、何、男性ホルモンの匂い……？　隆之さんのより、ずっと強い匂い……）
六十五歳の老人らしからぬ雄渾な肉棒だった。大藪のものよりもさらに幹が太く、エラも張っていた。ムンムンと牡の臭気を放つそれはやはり、性器というより凶器にしか見えない。
「その黒髪を犯し抜いてやるわい。ククク」
ベテラン市議会議員は乱暴な手つきでシニヨンを解きにかかった。キューティクルが光るつややかな黒髪がリビングの床にばさりと広がる。こっちの方が色っぽいですぞ別嬪さん、と喜びながら、髪に赤黒い亀頭肉をこってりと擦りつけてくる。
（くううっ、女性の髪をなんだと思っているの）
ニキビのようなブツブツがエラに密生した不潔そうな亀頭肉と清潔な黒髪が擦れ合い、すぐに湿った音が立ち始める。亀頭の切れこみから洩れる先走りの汁によって、女の命とも言える髪の表面に薄く膜が張っていくかのよう。
（おぞましいのに、微熱が出たみたいに髪のつけ根が熱くなってくる……）

「ぐちょぐちょになっていくわい、別嬪さん。くくく」
あばた顔の老議員は、そういう体質なのか、先洩れの汁の量が尋常ではなかった。まるでローションを塗りたくられたみたいに、髪の根元までぬるぬるしたものでまみれていく。
あるいは年齢によるものなのか汁は異様に生臭い。春香の頭皮が分泌する汗とそれが混ざっていく。老いた牡の臭気で鼻の中が掻きまわされ、脳までどろどろに溶けていくような錯覚に見舞われる。耳たぶや首すじまで傘肉でなぞられて、不快で仕方ないだけのはずなのに、なぜか身体からは力が抜けていく。
「さあて。そろそろわしもいただくとするかの、別嬪さんのおま○こを。ククク」
体臭の強い老議員は限界まで膨張していると思しい亀頭傘の先を、土建屋の放った精液によごれたままの膣口にあてがってきた。すでに熟年男に犯された後だからか、それとも髪や頭皮への刺激が性感と結びついてしまったのか、膣口の粘膜はふっくらとほころびを見せてしまっている。それを無理やり内側にねじこむようにして、ベテラン市会議員は淫水灼けした赤黒い傘肉を押しこんできた。
「塔堂先生まで。正気に戻ってください。いやです、もういや……こんな、こんな、こんな――ぐうう」
顔をゆがめるFカップ議員。挿入されるのは苦痛でしかない。愛情のない行為なの

だから当然だ。
（こ、これも熱くて硬い。ああ、そ、そんなに、中からすくい上げるみたいに動かさないで……いやよ。こんな乱暴なことされたら、今度こそ掻き裂かれてしまう……）
強張る腰に老人の汗ばんだ手がまわされる。塔堂はそのまま自分の腰を突き出すようにして、ごつごつした肉棒を深く埋めこみにかかる。
「い、たあい……うぐうぅ……ッ」
膣肉が裂けたのではないかと思った。しかし塔堂は特に驚いた様子も見せない。苦しむ春香の表情を愉しんでいるらしい。市長もニタニタ笑って声をかけてくる。
「人妻なのに、塔堂さんのを挿れられて痛がるほどに狭いのか？　これは楽しみだ」
（わたし、この人だけでもなくて、この後まだ、市長にも、こんなひどいことをされるの……？　やめて……いやよ……もう、許して……！）
今すぐこんなひどいことはやめて欲しい。ところが。ろくに口もきけなくなっていた。とにかく必死でもがいて逃れようとする。理屈で考えて今さらそんなこと無理なのはもうわかっている。だから理屈ではなかった。ところが。
（ああっ、中で、擦れて……奥が、えぐられる――っ）
もがいたことで偶然、秘奥の敏感なところが擦り上げられてしまった。膣肉は剛棒を絞り上げるみたいにヒクついていた。自然に腰と太ももがくねってしまう。

「なんだ？　汗まみれの腰をよじりおって。気持ちいいのか？　ああ？」
あばた面が不気味な塔堂老人はぎょろ目を光らせ、うれしそうに声をかけてくる。
さらには、人妻の腰のくねりを力ずくで押さえこもうというのか、ベテラン議員はいったん退いた肉棒を勢いをつけて強く埋めこみ、揺さぶるように腰を遣ってきた。
「ううっ、中、擦れて……そんな、そんな動かさ、ないで……ぬうぅッ」
膣肉が無理やりえぐられるような感覚に、ぬるぬるになった黒髪を振り乱して苦鳴を上げる春香。密着度が高いのか、擦り上げられるだけでもつらい。
「ふふふ。たまらんわ。春香くんがいやがって、そうやって身体をくねらせるたびに、その服の下でおっぱいがたぷたぷ揺れよる。直接見てやるか」
悪徳市長の太い腕が伸びてきてプルオーバーをたくし上げられ、ブラもずらされてしまう。市長もまた大藪や塔堂同様、いやがってもがく春香を見て、あわれがるどころか興奮を募らせているらしい。
「し、市長、いや。お、お願い……と、塔堂先生も、もう、やめて……」
「もうやめて、だと？　まだ始めたばかりだぞ。ククク」
「うう、そんな……ッ」
埋めこんだ直後に出してしまった土建屋と異なり、加齢臭の強い塔堂老議員は長期戦の構えを見せ始めている。大藪同様の太さと鉄の棒みたいな硬さを誇るペニスが、

みっちりとした狭い肉の道を強引に割り裂いて、今度はゆっくりとピストン運動が繰り返される。

夫との肉の繋がりが途絶えて以来忘れていた、肉棒のごつごつした質感や荒々しく反り返るしなり具合を、春香は今はっきりと膣粘膜で感じ取ってしまっていた。粘膜で異性を実感しているのだ。相手は夫ではないのに。

（わたし、穢されてる……よごされてる……取り返しつかなくされてる……）

突然ごりっ！　と音がした。老議員がいきなり勢いをつけて灼熱の肉茎を深く突きこんできた音だ。

「くぅうっ！」

春香は汚汁にまみれた黒髪を振り乱し、しなやかな肢体をのけ反らせる。

繋がりが深くなっていた。老人の汗ばんだ手でしっかりとお尻と太ももを抱えこまれ、もうまったく動けない。こんな一方的な行為なんて許せないと思う。あまりのつらさに涙がこぼれ、洟をすることもできないせいで顔までぬるぬる。

「ククク……入りおったわ。根元までな……さすが、別嬪さんだな。おま○この奥がちょうどいい具合にくねってわしのちんぽを刺激してきよる。それに、大藪さんの言っていた通りだ。締まりがすごい」

「う、うう……奥に、まで、届い――くる、し――」

少し動かされるだけで、弾力に富んだ陰肉は擦り剥けてしまいそう。締まりがすごいなどと相手は言うが、リビングでレイプされるという非日常的な事態に膣肉がおのおのいているのだろう。それだけだ。締めているわけではない。だがあばた面の老人はそれを気持ちよく感じているらしい。

「別嬪さんが苦しそうな顔をすればするほど、わしのちんぽの先におま○こ肉が密着して、擦れてきよる……おおっ、たまらん刺激だぞッ」

入れ歯臭も強い老市議は、その口をうれしそうにゆがませて摩擦を愉しんでいる。荒っぽく擦られるたびに、先ほどと同じようにごりっ、ごりっ、ごりっ、と粘膜同士の擦れるハードな音が鳴り響く。

（苦しい。苦しくて……なのに身体が熱くなっていく。こんなにひどく暴行されてるのに……ああ、硬くてみっちりしている凶器がわたしの中を擦ってくる……っ）

ギョロ目の老市議も春香同様、顔中に汗を浮かべ、はあはあと息を切らし始めている。剥き出しにされた水蜜桃が揺れる光景にも興奮を後押しされているらしい。

「ククク、たまらんわい。別嬪さんのおっぱいが、わしの突きに合わせて、苦しそうにぷるぷる揺れよるし」

「つらい……そんなに、ギチギチ突いてこないで。激しすぎる……ッ」

「おお、これはどうだ、奥の天井のザラつき。ししゃもの卵を敷きつめたみたいなプ

ツプツがうねりながら擦れてきよる。もうわしも、出よるわっ」
　こねるように腰を遣っていた老人は一気にスパートをかけ、激しくピストン運動させてくる。幹がいっそう膨張した状態で塔堂は動きを止めた。まるで膣内に栓をするように肉傘が開き、ぶる、ぶる、と震え始めた。
「いやあ、いやですっ、出さないでえ……っ！」
（ああ、こんな。熱く強張ったものがヒクンヒクン動いて、わたしの中にネバネバしたものを出してくる……っ）
　倍以上も年上の男性が放つ精液を膣奥で浴びる汚辱感といったら。脈打ちを膣肉で感じ取るだけでも、大切なものを思いきり土足で踏みにじられているかのよう。
（どうして、こんな目に、わたしが……）
　苦痛の汗と先ほどのビールで、脱がされかけのプルオーバーは肌にぴったりと張りつき、全身のラインの見事さがはっきりと露わになって男たちの目を愉しませてしまっていたが、そのことにマドンナ議員だけが気づいていない。体重と筋力で春香の抵抗を封じつづけている市長秘書の股間がもっこりと盛り上がっていることに気づくゆとりも、春香にはなかった。
「ククク。生意気な口をきいて市長さんの提案を断った女を、こうやってねじ伏せて、中でたっぷり射精する。格別な味だわい。おら、別嬪さん、くやしかったら、もっと

暴れてみせろ！　抵抗してみせろ！　できるものならな！　クククッ」
「……くぅ……くぅ、くやし、い……っ」
もぞもぞと身体を動かそうとするが、串刺しにされている今はそれがままならない。そんな二十代女子の中に、ベテラン市議会議員の粘液がまだ叩きつけられている。長い射精だった。
「そりゃあ、まだ、出よるぞ。別嬪さんを議会で見て以来、ずっと溜めこんでおいたザーメンよ。全部受け取れ。そりゃ、そりゃああ！」
どく、どく、どく、どく。下腹部をうれしそうにさらに数回振動させて、塔堂朋憲の射精はようやく終わった。どっしりとした巨根を抜き出されると、立てつづけに二人のものを咥えさせられたにもかかわらず膣口は、きゅっとすぼまった。まるで何も入れられていなかったかのように。
だが、そうでない証拠に――。
「ぁうっ」
うめくのと同時に入口の粘膜がひくりと蠢き、開いて、内側から逆流してきた白濁を吐き出し始めた。しかし狼藉はまだ終わったわけではなかった。
三人目。
肥満体の六十歳が、汗と精液にまみれた春香の股の前に陣取る。

「ふふふ。わしらの輪姦はまだ始まったばかりだと思え。次はわしだ」
「も、もういやああっ。わたしの身体をいったいなんだと……っ」
いやがる足首を掴み、禿頭の悪徳市長は子種汁をこぼす桃色粘膜に亀頭を擦りつけてくる。海綿体はたちまちみちみちに膨張した。
「わしの親切な提案を蹴るからこうなるのだ、春香くん。自業自得だと思え」
(こんな奴にまで。わたし、こんな奴にまで……!)
勝ち誇ったような笑みを浮かべると市長は、膣口を割り開くようにして肉傘をめりこませてきた。乱暴に根元近くまで埋めこませ、禿頭の鬼畜は目を瞠(みは)る。
「なんだ、この女……すごいではないか。これは、大藪さんが早く出したのもわかる。いや、塔堂さん、あんたよく、これを相手にあんなに何分も保(も)たせたものだ!」
発達した乳と熟した尻の持ち主は、悪徳市長の始めた突きや退きに合わせて背中や腰をよじらせる。それがまたしても色っぽいくねりとなって相手の目まで楽しませてしまう。わかっていても肢体は勝手にくねってしまう。たぷたぷと豊乳も揺れる。
(ああ、どうして。身体の芯が疼いて……胸の中まで何かでいっぱいにされたみたいに息苦しい……っ)
熱を帯びた硬い肉棒で擦られ、粘膜から分泌液が滲み出す。包みこんでいるペニスのたくましい弾力には、嫌悪感を覚えるのと同時に、理性が溶けていくような、何か

の麻薬でも嗅がされているような気持ちにもなってくる。
ズプズプと突きを繰り返されるうちに、感度も体温もぐんぐんと上がってくる気がしてならない。大藪と塔堂の出した精汁が潤滑液の役割を果たしているのだろう……と思いたいのだけれど、生温かいぬめりは時間とともに増えている気がする。濡れ始めているのかもしれなかった。
（どうして、こんな人たちに無理やりこんなことをされて、そんなことになるの！）
肥満体の鬼畜はぐりぐりと腰の動きを繰り返して、複雑な構造の女肉の感触を味わっているようだ。そうやって動かされると、勝手に声が口を衝いて出てしまう。
「くぅううっ！　も、もう、やめ……んくぅう」
「なあ、春香くん。わしは、前からあんたのことが好きだったんだ」
市長は急にそんなことを言い出した。
「く……冗談、じゃ、ないわ……ふざけないで……こんなことをしながら、何を」
「冗談で言っておるのではないわ。わしは純粋な気持ちから言っておる。いいか、春香くん。男というものは、別に女なら誰でもいいわけではないのだぞ？　惚れた女とだけ子づくりしたい生き物なのだ。喜べ。あんたはこのわしに選ばれたのだ」
全身から汗が一気に退いていくほどの不快感があった。
わたしには夫がいるんです！　とあえぎつつ抗弁するが、大藪が口を挟んでくる。

「ふん、不能なんだろう、あいつは。例の交通事故のせいでな。本人が打ち明けてくれたから、わしゃあ知っとる」
（え――）
本当に夫はそこまで大藪に話してしまったのだろうか。夫婦間のきわめてプライベートな事柄なのに……。
「なるほど。その顔を見ると、大藪さんの言っていることは本当のようだな。それならずいぶんこの身体を持て余しておっただろう？　気持ちよくしてやるぞ、春香。なあ、わしの気持ちがまだわからんか？　こんなに大事に思っているのに」
（な……なんて気持ち悪いこと言うの、こいつ！）
――キュッ。
無意識のうちに全身が嫌悪感で強張った。でっぷりと肥えた六十男は相好を崩す。
「おおっ！　今、締めつけてきおった！」
「でしょう、市長？　すごいでしょうが、奥さんのおま〇こ。レイプされる方が感じるタイプなのかもしれませんぜ。奴隷の素質があるかもしれませんな。うへ。うへ」
大藪がそんなことを言ってくる。違うわ、そんなんじゃない、誤解だわ、と言葉を必死で絞り出す春香だが、毛穴からはふたたび汗が噴き出し始めていた。
「ふうぅ、うううぅ……苦しい、だけなんだから……もう、やめてったら……くふぅ」

「何をやめて欲しいのだ？　そこをはっきり言ってもらわんとわからんな。ふふふ」
もがく体力が失せてぐったりとなってしまう春香。あわてることはないとばかりに、市長も乱暴な動かし方は打ち切り、こってり、こってりと何かの字を書くみたいに腰をまわし出す。そうされると膣粘膜はますます熱くなり、濡れも増してくる。
強引にレイプされて苦しいというのは変わらないながらも、媚肉の奥では何かがたしかに変わり始めていた。不能になってしまった夫との精神的な結びつきだけで満足しているはずの自分の肉体が、もう一度肉の悦びを満喫したいと、その持ち主である春香の意識に働きかけてきているのか。
（そんな。わたし、身体の中まで敏感になってる。わかりたくなんかないのに。ごつごつした硬さだけじゃない。だ、男性器の表面の血管の張り巡り方までわかる。ひくひく動いているのがわかる……っ）
「お？　どうした、春香くん。あんたのすけべな粘膜が、わしのに吸いついてきよるぞ。ふふふ」
「嘘だわ、嘘よ……わたしは、苦しい、だけ、なんだから……」
「口ではあんたはそう言ってばかりだが、身体はそうでもないのだろう？　ふふふ」
「あなたたち、本当に最低。一人の女性を……三人でなんて……」
「ふふふ。一条春香くんなら骨盤も頑丈にできておって、この程度は大丈夫だろうが。

わしの秘書の黒田にもやらせようかの？　三人ではなく四人になるぞ」
「ひどい、そんな……ぁうぅン……ぁうぅン……つらい――っ」
乱れた黒髪はまるでゲリラ豪雨に遭った直後のように新たな汗で濡れ、そのうちの何本かは頬や口元に張りついている。
「ふふふ。つらいなどと言っておるが、声のトーンはとうに変わってきておるわ。出し入れするたびにぐちょぐちょと音が立ち始めておるのが自分でも聞こえるだろう、春香くん。大藪さんらのザーメンの音ではなかろうが」
「うへ。うへ。愛液だ。人妻の愛液だ……ぬるぬるしておる……」
五十八歳の土建屋が結合部を覗きこんでよだれを垂らす。六十歳の悪徳市長がそれまでよりも荒っぽく腰を遣い出すと、
――ぐしゅっ！
激しい音が湧き立った。二十八歳の女性市議は眉をひそめ、眉間に深い皺を刻んでいた。自分が苦しみに耐えているのか、それ以外の何かをこらえているのか、わからなくなっている。荒っぽい律動をつづけられて、ぐちゅ――ぐちゅ――！　と濁った摩擦音が鳴り響く。
「どうした、春香くん？　あんたも感じておるんだろう？　亭主のことなんか忘れるくらいに気持ちいいんだろう？」

ずぽずぽと腰を遣い、春香をうめかせながら、禿頭の性獣が訊いてくる。春香は答えられない。さっきまで苦痛を覚えていたのは間違いなかった。けれど。その苦痛で膣粘膜の反応が促されているとしか思えない。乱暴に出し入れされればされるほど湧き出すシロップの量は増し、しっとりと濡れた肉は勝手に相手を締めつけてしまう。

「おお、これか、塔堂さんが言っておったのは。細かいザラつきのある粘膜がしなしなとわしのを包みこんできよるわ。よおし。わしも、中に出してやる」

「いやあ……いやよお……もう、よごされたく、ない……ッ」

拒絶のさけびとは裏腹に、奥まで掻き分けられた二十八歳の狭い肉輪は、まるで射精を促すかのようにぴったりと、ぶさいくな六十男の肉棒に張りついていた。

「愛しておるから出したいのだ。まだわからんかっ」

(おぞましいこと、言わないで……っ)

豚みたいな肥満体の持ち主は深いところでのピストン運動を繰り出す。突く時には子宮頸部が亀頭に押され、退く時には愛液を掻き出される。両方の刺激に反応して膣肉がしなしなと震え、肉棒を締めつけてしまう。

(ああ、き、亀頭、硬すぎる。猛々しすぎる。わたしの身体、つぶされる……っ)

やわらかな媚肉をえぐってくる男根の幹はゴツゴツしており、よく育ったナスかバナナのような凶悪なカーブを有していた。それがもはやわずかな隙間もなく膣肉輪の

内側を満たしている。もし膣が喉ならとうに窒息しているだろう。
「おら、イクぞっ。このまま奥の奥に出してやるわっ」
「そ、そんなの、いやあっ！　出さないで……ッ」
人妻の締めつけを愉しみながら、禿頭も太鼓腹も見苦しい六十歳の野獣市長はひときわ深く打ちこんで、あごをリビングの天井に向けた。
（いやあっ、また、わたしの中で大きくなってる……エラが動いてるっ）
「うおお。出よるっ。出よるわ。たっぷり出よるわいっ！」
膣肉に包まれたままで、握った拳のように硬くなった肉傘が、脈を打つように猛々しくふくらんだり元に戻ったりを繰り返す。その反復のたびに鈴口からは、持ち主の年齢には似合わないほどの勢いのよさでどろどろした濃厚な精液が迸り出ていた。
どぴゅっ、どぴゅっ、びゅるるる――！
（ああ、また、また膨張して。ああ、そんな。出されている……っ）
入り組んだ器官の奥に重い精液がびしゃびしゃとぶち撒けられていた。満月の晩に突然月蝕が始まって世界が闇に閉ざされていくように、妊娠の恐怖でこころの中がどす黒く染められる。と同時に肉体の本能なのか、汗腺が開いて人妻の淫臭がむわっと立ちこめてもいた。
（いやあっ。いやよおっ。出さないで。出さないで。赤ちゃんができちゃったら、ど

うしたらいいの、わたし……っ！）
子宮口近くの繊細な粘膜で噴火のような射精を浴びているのをひりひりと感じながら、マドンナ議員の意識は現実から遠のいていく。
どぷっ。どぷっ。どぷっ――！
（あああ、頭の中まで、こいつの精液で、真っ白に塗りつぶされていくような――）
最後にかすかにわかったのは、とどめのような精液のひと噴きをどぷっと受けて自分の腰がみだらによじれたことだけ……。

※

身体を揺すられて意識を取り戻した。
強引なレイプによる精神的打撃が強すぎて、しばらく気を失っていたのだ。男たちにとってはそれは意外な反応だったらしい。
「やれやれ。あの勝ち気なマドンナ議員さんが、ちょっと中出し輪姦されたぐらいで気絶とは。情けない。わしゃあがっかりしたよ」
卑劣な土建屋の自分勝手な感想を耳に浴びながら春香は目を開けた。にやにや笑って見下ろしている野獣たちの顔が飛びこんでくる。目を逸らしたくなるのを意志の力で押しとどめた。
「許せないわ。殺したいくらい……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/